

「願い」さまざま—日本・中国—

鈴木重治

春の「願い」

田辺の一休寺で除夜の鐘を撞いて、今年も新たな春を迎えた。一休寺では、重要文化財に指定されている鐘楼を来訪者に解放して、誰れにでも除夜の鐘を撞かせてくれる。

自分で撞く鐘だけに、この腰高の鐘楼は一休さんともども親しみ易い。除夜の鐘を撞くだけで、京の田舎に住む嬉しさがあじわえるのも面白い。誰れにでも撞かせるといっても、除夜の鐘は百八であって、それ以上は撞かせないし、それ以下のこともない。その数に意味があるからである。個人的には、百八という数字にはとりわけて関心もないが、人間としての「願い」には大いに関心がある。

方丈では、その中央の祠堂に安置されている一休弾師の座像の前で、修正会法要が営なまれ、住職の読経が枯山水の東北庭や、白砂敷の前庭の静けさの中に吸い込まれて、暗やみの本堂までは、とどきそうにない。竹籤を控えたこの唐様仏殿は、さして大きくはないが、入母屋造、檜皮葺で、正面中央両開棧唐戸、左右に花頭窓、柱上の唐様三手先の組物、軒裏に二重の扇樋が認められる。内部の

天井も特徴的で、特に外陣上方の構成にも禅宗的風格がある。ざわめきもない森閑とした本堂で、初春の「願い」に頭を下げる人達を見ないのもうれしい。

静けさの中の「願い」に対して、はち切れんばかりの騒々しさ、むんむんとした熱気の中で、しかも長時間にわたったの「願い」の行事がある。かつて参加したことのある高千穂の夜神楽などもその一つである。日向灘に注ぐ五ヶ瀬川の上流域にある山深い村々の祭りである。十二月から二月にかけて、山間部の村から村へと、この夜神楽は移っていく。

高千穂の山々にこだまする神楽太鼓のひびき。ときすまされた笛の音。昼過ぎから始まって、夜を通して三十三番も舞い続ける若者のバイタリティー。老人達も若者に負けじと酌み交わす焼酎のすえた香り。冷えきった霜柱をも押しつぶす神楽せり歌。山の端に太陽がのぼるころになって、ようやく立ち上った長老の力強い手力男之命の舞、岩戸開きの舞である。

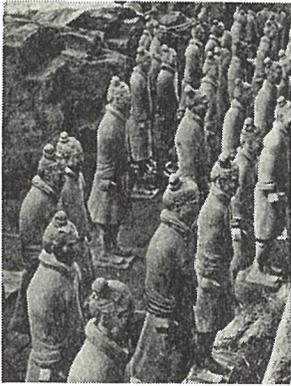
夜神楽のクライマックスは、まさに太陽の復活であり、新しい生命の誕生を意味する。

夜神楽は、山村の民のひたすらな春を呼ぶ「願い」なのである。

九牛の一毛

「春の雨は油のごとく尊い。」中国の西安で耳にした言葉である。日本の農村でも充分に通用するだけでなく、名言というより金言であって、意味深長である。

唐の三代皇帝高宗と則天武后の合葬陵である乾陵や、秦の始皇帝陵、兵馬俑坑、更に先史時代の環濠集落である半坡遺跡などを見学する矢先の雨だけに、古都長安の雨といってもそれを羨しむなどのゆとりなどなく、明日の空を気にしながらの大雁塔からの眺めであった。このような中で、西北大学の王さんの



写①

「春の雨は……」の言葉である。

我れに帰ったのを憶えている。あれだけの人口を持ちながら、国民一人当りの農地面積が最低の国のことである。沃野千里、天府の国である関中平野の住民を含めて、圧倒的な多数は農民であり、この農民の大きな「願い」に応える雨であったに違いない。まさに新芽を出したばかりの麦畑のごとくまでも続く大地を見ながら、ふとこの土地の人達の自然のかわりを想わざるを得なかった。

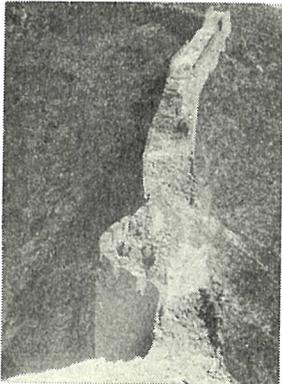
見学して廻ろうとする中国の歴史的な遺産も、自然環境を念頭にしてこそ理解されるであらうし、それぞれの想いや心情さえも大地に根ざしたものであるとして、はじめて個性を持つのに違いないのだから。

雨は朝までにあり、翌日からの見学は、黄塵も舞うことがなく、八達嶺あたりの長城に見た雄大さや、蘆溝橋事件の記念碑ともいふべき宛平県城の無惨な弾痕の強烈な印象とともに、長安の古都の遺跡としての大雁塔も脳裡にさわやかに焼き付いている。

西安でも博物館のいくつかを見学したが、教育と研究を目的とした西北大学の考古学陳列室や、咸陽市博物館、臨潼県博物館など

は、それぞれに先史時代、漢代、戦国時代の資料に特徴がある。遺跡博物館としての兵馬俑坑、半坡、乾陵とその陪葬墓のうちの永泰公主墓、章懷太子墓、懿德太子墓などの遺跡公園化の進め方の差も工夫のみられるものであった。

遺跡の一つ一つに個性があるように、それらの保存と活用について、一つ一つの処方箋が作られているのであろうが、中には日本の常識では考えられないものがあった。これが風土なのであろうか。日本の常識で考えること自体にまちがいがあるに違いない。中国は中国で、日本は日本なのだから。日本と中国の共通点と相異点を歴史遺産を通して理解しようとする、増々歴史の重みを感じることに



写②



写⑧

になる。日本と中国とのかかわりを知りたいとする「願い」も、「南柯の夢」なのであるうか。

東西南北

北京での宿舎は、鼓楼に近い侶松園であった。ここは元代の蒙古貴族の屋敷を部分的に

補修してあるが、おおむね旧状を呈しているという。寝室の前の中庭には、一本の棗の大木があった。奥の中庭には二本の老松が東西に並んでいる。林檎の若木は、すんなりとした樹形で萌黄色の若葉をつけていた。赤・緑・青など強烈な彩色の建物も一部にあるが、古びて重厚さを増している反りの大きい屋根瓦も大きく、部厚い。さすが都の貴族の家だ。地方の農村にみる瓦とは大いに違うのである。

江南の江西省樂平県のあたりでも、台湾に向かいあう福建省の徳化県のあたりでも、農村の家々にみる瓦は小ぶりなのである。もとより瓦だけの差ではない。北と南の差は料理や言葉の上でも大きく、さすが多民族国家であるだけに地域差が強烈に認められるのは当然である。浙江省の寧波や、福建省の泉州、厦門あたりになると、墳墓の形態まで北とは全く違う。日本でも沖縄だけにはか見られない亀甲墓は、まさに福建墓の系統であり、北への展開をみせない墓制ということになる。

中国で集中的に見て廻った陶磁器関係の遺跡や遺物からすると、これまた日本に搬入された奈良時代以後の資料の生産地にも、時代

による地域差が指摘される。例えば、同志社の校地から出土する中国産の輸入陶磁器は、中国の唐代や五代までのものは発見されて無く、すべて宋代以後の資料であり、しかも浙江省、江西省、福建省などの江南地方のものに限られる。このことは、日宋貿易や対明貿易によって輸入された中世以後の陶磁器のふるさだが、江南にあることを示している。

西から東へと運ばれた陶磁器に対して、東から西へと、すなわち日本から中国へと運ばれたものの中に日本刀があることは、よく知られている。しかし、中国からもたらされる染付の茶碗一個に対して、日本刀が百振りも必要であった事実のあることを知る人はすくない。室町時代に相当する中国明代の記録に記されているものである。

江戸時代に入って、日本でもようやく染付や青磁や白磁が作られるようになった。大きな技術革新である。この技術革新は、大きな「願い」であったに違いない。大陸から日本に導入された文化や文明の一つ一つを、あきらかにしたいとするのも「願い」の一つであれば、逆にもたらしたものをあきらかにしたいとするのも「願い」である。

日本と中国の関係を歴史的にみたととき、現在ほど市民レベルの友好関係が発展したことはない。相互に理解し合うことは、相互に尊重し合うことであり、相互に発展することに通じる。学术交流の発展や、市民レベルの広範な交流が更に発展することは、大きな「願い」である。

写真説明

写①、出土した等身大の秦始皇帝陵兵馬俑

抗の俑群（西安、秦俑より）

写②、北京郊外の八達嶺あたりでは、万里の長城も常に補修が進められている。

写③、北京から周口店洞穴に向う途中に、

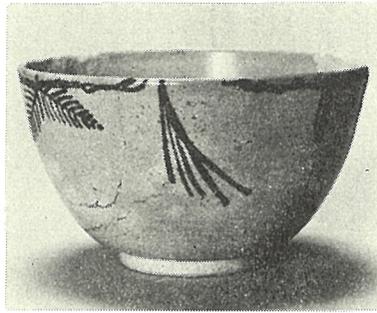
蘆溝橋がある。蘆溝橋事件の際に、日本軍の攻撃によって無惨な姿となった宛平県城は、記念碑的に保存され、広島島の原爆ドームと同様に見学者が多い。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）

同志社校地出土の埋蔵文化財

鈴木 重治

あさひやきしめなわもんわん
朝日焼注連縄文碗



江戸時代 口径11.1cm、器高6.4cm、底径4.6cm
同志社中学校新彰栄館増築地点 SK204 出土

同志社中学校新彰栄館増築地点の発掘調査の際、径二・四米の二段掘りの土坑が検出され、その埋没土の中から土師器の皿や焼塩壺などと共に出土したのが当資料である。

まろみのある整正優美なプロポーションを持つ碗で、口縁直下に鉄絵による注連縄

文が雄渾な筆致で描かれていて、飾りの護葉や裏白も素朴であり、さわやかである。

釉調は、淡い桃黄色で、露胎部の曇付を除いて全面に施釉されていて、胎土はきめの細かい黄白色を呈している。また器の内外面には、部分的に紅斑を散在させて、いわゆる御本手の茶碗の典型である。曇付に接して、権十郎印と呼ばれる早朝日の刻印があり、遠州好みの七窯の一つとしての朝日焼の出土例としても、稀れにみる優品である。ちなみに、朝日焼は慶長年間（一五九六～一六一五）奥村次郎右衛門によって宇治朝日山に築窯されたのが創始とされている。

当資料は、文様構成からも明らかに若松文、松竹梅文、万歳文などの碗と同様、正月の初釜の際に使用されたものである。

出土地点が、薩摩藩邸の跡地だけに、武士のかかわる綺麗さびの茶としてばかりでなく勇猛な武士と安らぎの対比にまで想いを馳せることすら可能である。また、共存資料の土師器や焼塩壺は、近世の物質文化史を理解する上で考古学的に重視される一群であり、当資料の検出の意義は大きい。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）